

報告要旨

報告1 「ヒュームにおける人格の同一性について 知性と情念の対象としての 」

報告者： 真船えり (まふね えり)(日本大学文理学部非常勤講師)

ヒュームの人格の同一性に関する議論は、『人間本性論』第1巻「知性について」第4部第6節において論じられたが、その方法論と独自の前提によって、自己の観念は「虚構」であり「自己の観念はない」としたことから、一般的な哲学史においては「自己の存在まで否定した」と書かれていることが多い。しかしながら、第2巻「情念について」においては、情念の対象としての自己についてはその存在を前提して議論が進められていることは周知の通りである。ヒュームは、「われわれの思惟または想像力」にかかわる人格の同一性と、「われわれの情念、すなわち、自己自身についていただく関心(自己自身に対する気遣い)」にかかわる人格の同一性とを区別し、第1巻では前者のみを扱った。後者は、情念の対象としての自己であり、第2巻「情念について」において扱われている。本報告では、ヒュームにおける人格の同一性をこれら知性と情念の2つの側面から考察したいと思う。

報告2 「ファーガスン研究の現在」

報告者： 青木裕子(あおき ひろこ) (慶應義塾大学非常勤講師)

1990年代半ばからのアダム・ファーガスン研究の隆盛は著しい。著作の新版、書簡集、手稿集などが続々と出版され、ファーガスンの思想の多様な側面に光を当てる研究が発表され続けている。その背景として、市民社会と国家、古典的共和主義に対する多様な関心の高まりなどが挙げられ、ファーガスンの多層的な議論がスコットランド啓蒙研究という枠組みを越えて研究者たちを引き付けていると言えよう。今年1月には記念すべき初のファーガスン研究論文集、Eugene Heath and Vincenzo Merolle(eds.): Adam Ferguson: History, Progress and Human Nature, London: Pickering and Chatto, 2008, 253 pp.が出版された。また、11月には第2弾 Adam Ferguson: Philosophy, Politics and Society が出版される。本報告では、このようなファーガスン研究の著しい拡大と深化、その背景を整理し、ファーガスン研究の今日性の理解を深める一助としたい。